

From Rio to

リオデジャネイロ五輪・パラリンピック
応援ありがとうございました。

リオデジャネイロから、それぞれの戦いを終えて帰ってきた
中山由起枝と藤田征樹。対照的な結果を残した2人とはいえ、
どちらもすでに「立ち止まっている」ことは選ばない。
2人のアスリートが次に向かうのは何処なのか――。

取材・文／荒川裕治 インタビュー撮影／倉部和彦



男子個人ロードタイムトライアル(運動機能障害C3)で手にした銀メダル。

成長はまだまだできる。自分を含め、 クレイ射撃のこれからを“発信”したい

日立建機 広報戦略室 クレイ射撃部 中山由起枝

確かに新聞記事にあったように射順は地元ブラジル選手の後で、私が撃つ順番になって大きな歓声は鳴り止まずにいました。それから試合後、記者の方から右か

ら吹いていた風について質問されましたが、実のところ、それはほとんど気になっていませんでした。負けた理由はそういうことではないんです。21人中20位という今大会の結果は、ただただ、私の実力不足の一言に尽きます。

1ラウンド目は本当に集中していたのですが、25点中19点とセミファイナル進出には及ばないスコアに「もう取り返せない」と精神的にぐらついてしまい、その後はキツかったですね。今までのように最後の3ラウンド目でダメだったわけではないのです。それでも、五輪はいつも泣いて終わっていたのを今回、娘からは「笑顔でしめて」と言われていましたし、ここまで来ることができたのも自分のチカラだけでなく、多くの皆さんの支えがあったからこそと気持ちを奮い立たせ、最後まで諦めなかったことが、笑顔で大会を終えることができた理由だと思っています。

ここまでシドニー、北京、ロンドン、そしてリオデジャネイロと4回の五輪に出場しました。今、この時点で強く感じているのは、自分自身にはまだまだ可能性があるということです。

ロンドン大会終了時から、海外でのトレーニングを中心に、改めて自身のスキルを磨き、昨年8月のアゼルバイジャンでのワールドカップでは、75点満点中、自己最高得点である74得点で優勝し、ここで五輪出場枠を獲得しました。今年の1月はインドで開催されたアジア五輪予選大会でも優勝し、自分自身成長している手ごたえを感じています。

当然、今回の結果には納得できていないという思いもありますが、4年後は東京

です。ここまでやり続けてきたことを考えても、また期待していただいていることを考えても、続けていきたいと思っています。家族や地域の方々はもちろんですが、特に今回、日立建機本社だけでなく、土浦工場でも五輪出場の壮行会をしてもらい、多くの皆さんからエールを送られたことは忘れられません。だからこそ、皆さんの期待に応えられなかった悔しさと、「もう一度」という気持ちを強く抱いているのです。

そしてもう一つ、私を突き動かしているのは日本の「クレイ射撃」のこれからです。もう自分のことだけを考えて競技をする年齢ではなくなりました。未来に向けて、できることをしていかなければならないと考えています。

全体的なレベルアップをするにはどうすればいいのか。私の場合はこれまで出場してきたたくさんの国際大会の経験や、海外トレーニングの経験がありますが、若い選手たちにはまだ、なかなか同じような機会がありません。そのために私からクレイ射撃そのものを“発信”して、もっとクレイ射撃を知ってほしいと考えています。これからもぜひ「中山由起枝」を、そして「クレイ射撃」を応援してください。



リオでは結果を受け止めながらも笑顔で大会を終わらせた。

世界と戦う中で頭1つ抜き出るために トレーニングをさらに進化させていく

日立建機 研究本部 技術開発センター 藤田征樹

今回は出場した5競技の4つ目、「男子個人ロードタイムトライアル(運動機能障害C3)」で銀メダルを獲得しました。ご声援いただき、ありがとうございました。ただ、銀メダルという結果は、自分では最低限の結果だと思っています。北京でもロンドンでもメダルは取りましたが、正直なところ、目標としていた金メダルが取れなかったことは、「本当に悔しい!」です。

難しかったのは気持ちのコントロールでした。今大会では、最初の男子個人追い抜き(運動機能障害C3)でもメダルが狙えると思っていたのですが、わずかに0.3秒足りずに予選から決勝へ進めませんでした。他の大会で優勝したとしても、世界最高峰であるパラリンピックで勝つことがいかに難しいかを改めて痛感しました。実力の部分もありますし、運もあります。だからこそ、パラリンピックなのでしょう。

ロンドン大会を終えた後に、私自身、まずリオに向けてどこをめざすのか、何をしていくのかという整理をしました。めざすところを明確にし、いろいろとところから力をお借りすることにしました。そして、私に関わってくれるスタッフの皆さんと共通の認識を持って目標を明確にしていきました。



リオに向かう前、地元・稚内市の人々から贈られた応援旗。

目標を立てた上で、どうステップを踏んでいくのかは大きな課題でしたが、それは「トレーニングする」しかありません。トレーニングそのものの内容、結果の分析、そして評価を繰り返すことによってトレーニングの質も上がりましたし、会社の理解もあって練習量も増えました。

2014年からはスタッフに工学博士の柿木克之さん(BlueWych*代表)を迎え、「結果を出すためには」と提示された今まで以上に負荷をかけた高いレベルのトレーニングに、「しんどい」という思いもありましたが、自分で負けずに取り組んでこられたことと、スタッフとの共通認識が今回の結果に繋がったと思っています。

ここまでの過程も含め、取り組んできた内容については満足していますし、自分にはまだまだ伸びしろがあるという自信にもなりました。それだけに、くどいようですが、勝てなかったことは本当に残念で、実際、私以上に悔しがってくださる人もいらっしゃいますし、関わってくださった皆さんに申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

さらに強く、さらに速くなっていく世界と戦う中で頭1つ抜き出るために何が必要か。とにかく高い次元での争いになってきてい



ロードレースでは最後の最後まで全力を出し尽くした。

ますから、トレーニングも進化していくことでしょ。ですからこれからの4年間、トレーニングはさらにハードになっていくと思われます(苦笑)。

満足したら、終わりです。次の東京をめざすとしたら本当に勝つかありません。今より強くないとダメですし、これまでの大会とはまったく違うプレッシャーや責任も出てくるでしょう。覚悟を決めて取り掛かろうと思っていますし、期待に応えられるよう邁進していきます。よろしくお願いします。

